

鳥取市小中学校道徳郷土資料集第二編（児童・生徒用）

鳥取市の志



平成29年3月
鳥取市教育委員会

不
思
不
思



はじめに

鳥取市では、めざす子ども像として「ふるさとを思い 志をもつ子」を掲げ、子どもたちが自らの道を選び社会へはばたいいくために、ふるさとへの思いや志を持ち、たくましく活躍できる人づくりを進めています。各学校においても中学校区で小・中九年間を見通して子どもたちの心を育てるとともに、家庭や地域と一体となった道徳教育を進めているところです。

前回、鳥取市小中学校道徳郷土資料集『鳥取市の志』を作成し、鳥取市を築いてきた人々の生き方に学ぶ資料としてきましたが、この度、第二編を作成しました。本書に収められた郷土資料は、各学校の先生方の「この人物の生き方にぜひ子どもたちを出会わせたい」という熱い思いから、地域の方々に聞き取りをしたり資料を集めたりして作成されたものです。

本書に出てくる長谷敏司さんは、東京での事業に成功を収め、その遺志を引き継いだ遺族は、郷土の後進のために「財団法人長谷育英奨学会」を設立しました。その奨学金を受けた青少年は全国各地で活躍しており、まさに志を引き継ぐ姿と言えます。また、鳥取市在住の人間国宝、前田昭博さんは、地元河原町に腰を据えながら白磁の創作活動に取り組み、その作品のすばらしさは世界中で認められ、高い評価を得ています。

これからの変化が激しく、将来の予測が難しい時代を生きる子どもたちにとって、こうした鳥取市にゆかりのある人々の生き方に学ぶことは、自分の人生を切り開いていく勇氣とたくましさを育む原動力につながります。

「特別の教科 道徳」が、小学校では平成三十二年度から、中学校では平成三十一年度から実施となります。今回、『鳥取市の志』第二編の作成にあたり、第一編と合わせて各学校で道徳授業において活用していくことで、さらに鳥取の子どもたちが志を立て、将来の夢や希望を持って、自分の生き方について考え議論する道徳の時間になることを期待しています。

最後になりましたが、熱い思いで資料を作成・提供してくださった各学校の先生方、本書の編集にご尽力くださった郷土資料集作成検討委員会の皆様、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成二十九年三月

鳥取市教育長 木下法広



【目次】

★ はじめに

★ わたしたちのふるさと 鳥取市

小学校

中学年

1 鳥取県に梨を広めた人 〔北脇永治〕…………… 1

2 作治さんの挑戦 〔田中作治〕…………… 5

3 みんなの思いをのせて 〔若葉台ふるさと音頭〕…………… 9

高学年

1 力強く魂を込めて 日本中を駆けめぐれ！ 〔逢鷺太鼓連〕…………… 14

2 池田家墓所を守る 〱沖 広俊〱
.....
18

3 石碑の人 〱尾崎 翠との出会い〱
.....
21

4 歴史をつなぎ 〱思いをつなぐ 〱尾坂 功〱
.....
24

5 流し雛に思いをこめて 〱絵筆ひとすじ 〱前田直衛〱
.....
28

6 「文武併進」を心の支えにして 〱山根幸恵〱
.....
33

中学校

1 私がめざした白 〱人間国宝 〱前田昭博〱
.....
39

2 八芳園にかけた夢 〱八芳園設立者 〱長谷敏司〱
.....
42

市章



市章の由来

旧藩時代に因伯の印として使用された紋章（○は文、◇は武を意味したものとされている）を一つに重ね、その中に小てん（漢字の書体の一種）の「鳥」の字を組み入れたものを、大正2年7月26日に鳥取市の市章として決めました。

鳥取市の木



さざんか

昭和18年の大震災、昭和27年の大火災で市街地のほとんどを失った鳥取市に緑を取り戻そうと、昭和43年5月2日に「鳥取市の木」とされたサザンカは、年間を通じてまちを緑で潤し、山陰の厳しい冬に花を咲かせるなど、鳥取市を代表するにふさわしい木として新鳥取市に引き継がれることとなりました。

鳥取市の花



らっきょうの花

鳥取市が全国に誇る「鳥取砂丘」において、10月から11月初旬にかけて砂の畑を赤紫のじゅうたんで覆う「らっきょうの花」は、中国原産のユリ科の多年草で、江戸時代の参勤交代の折に持ち帰られ伝わったものが最初であるとされ、今では鳥取市を代表する特産品のひとつとなっています。

鳥取市の鳥



オオルリ

オスは、頭から背、尾まで上面がコバルトブルー。美しい鳴声で知られる鳥で、ウグイス、コマドリと並んで、日本の三鳴鳥といわれています。本市では、春から秋にかけて市内全域に生息しています。特に、樗谿公園大宮池周辺、袋川・佐治川・河内川などの市内各河川の上流域でよく見かけられます。

小学校

◆ 中学年

◆ 高学年

鳥取県に梨を広めた人
北脇永治きたわきえいじ



北脇永治肖像写真
鳥取20世紀梨記念館所蔵資料より

松保村まつほ（いまの

鳥取市桂見かつらみ）の

北脇永治きたわきえいじは、山を

開いて、くだもの

を植えようと思いつきました。そこでさまざま

まなくだものを育て始めました。しかし、鳥

取はみかんを育てるには寒すぎ、りんごを育

てるにはあたたかすぎるなどしてうまくいき

ません。

ちょうどそのころ、関東地方かんととうでは「二十世

紀梨なし」のひょうばんが高くなっていました。

したざわりがよく水分たっぷりであまい実が

なる梨です。

一九〇四年（明治三十七年）の春、永治

は、十本の二十世紀梨のなえ木を手にいれま

した。これが、鳥取県の二十世紀梨の始まり

です。

「ほう、これはなんちゅうみずみずしい梨

だ。」

一九〇九年（明治四十二年）の秋、二十世

紀梨が鳥取市の市場に出ると、その味わいは

たちまちひょうばんになりました。そして、

二十世紀梨は、ほかの梨より高いねだんで取り引きされるようになりました。それを聞いて、二十世紀梨を育てる農家もふえてきました。

永治は、このすばらしい梨を、なんとかして鳥取県中に広めたいと思いました。

「梨を作って、農家のくらしをゆたかにしよう。」

永治のゆめは、広がります。

ところが、この二十世紀梨は、とても育てにくい梨でした。特に実がくさって落ちてし

まう黒はん病びょうに弱い梨だったので。鳥取県よりもはやくから二十世紀梨を作っていた、愛媛県えひめ、奈良県なら、岡山県おかやま、千葉県ちばでは、この病気がはやったため、とうとう二十世紀梨を作るのをあきらめたほどです。

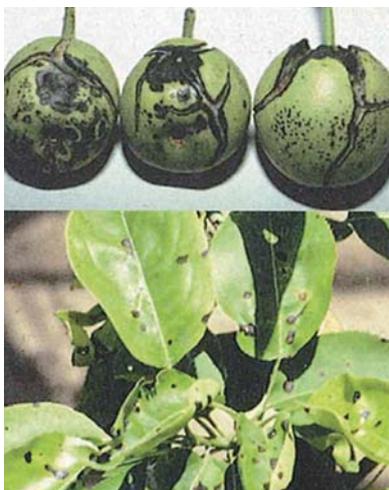
二十世紀梨の黒はん病は、鳥取県の中ほとんど広がっていきました。なんとかふせごうとしても、うまくいきません。黒はん病の

ため梨が取れ

ず梨作りをや

めてしまう農

家も出てきま



黒はん病にかかった 20 世紀梨
鳥取 20 世紀梨記念館所蔵資料より

した。

「もう、二十世紀梨はだめだ。ほかの梨にか

えたほうがええ。」

という声も強くなっていきました。けれども

永治はあきらめません。永治と黒はん病との

戦いは、来る年も来る年も続きました。

二十数年かかって、一九二六年（大正十五

年）、ようやく黒はん病のふせぎ方が分かり

ました。黒はん病は、薬をまいたりふくろか

けをしたりすると、ふせぐことができるので

す。しかしそのためには、鳥取県全部がいつ

せいにやらなければききめはありません。

「よし、鳥取県全部の黒はん病をたいじする

のだ。」

ふたたび元気をとりもどした永治は、黒は

ん病をふせぐ組合を作ることに力を入れまし

た。そして、そ

の先頭に立った

永治は、鳥取県

の梨を作ってい

る人たちと協力

して黒はん病を

なくすことに取

り組みました。



1958年（昭和33年）北脇家の二十世紀梨選果のようす
鳥取20世紀梨記念館所蔵資料より

永治たちの取り組みにより黒はん病の心配はなくなり、鳥取県の二十世紀梨作りは、みごとに立ち直りました。そして、二十世紀梨といえは鳥取県といわれるまでになったのです。

永治が鳥取県に広めたこの記念すべき梨の木は、「鳥取二十世紀梨の親木^{おやぎ}」として県の天然記念物にえらばれ、今でも「とっとり出合いの森」で毎年実をつけているのです。

(世紀小学校自作 一部改作)



とっとり出合いの森にある鳥取二十世紀梨の親木

作治さんの挑戦 ちようせん

田中作治 さくじ



「おはよう。きょうも

元気？」

毎週月曜日の朝、宮ノ

下小学校の児童げんか

ん前では、子どもたちの笑顔がいっぱいです。

その中心には、約九年間、宮ノ下小学校で手話

によるあいさつ運動をされている田中作治さん さくじ

のとびきりの笑顔が見えます。登校してくる子

どもたちに手話で「おはよう。」と伝えながら

スケッチブックに書いた自分の考えや子どもた

ちへのメッセージをもと

に、子どもたちと交流を

続けているのです。

作治さんは岡山県に生 おかやま

まれ、三才のとき、高い

熱が出る病気が原いんで耳が聞こえなくなりま

した。小さいときはまわりの友だちと会話がで

きないので、一人で魚を取って遊ぶこともよく

ありました。八才になり、鳥取市のろう学校に

入り、家の人とはなれて生活しました。家に帰

りたくなって汽車に乗ってにげ帰ったこともあ

りました。そのころの作治さんは、なみだを流



すことが多かったのです。そして、人とのつきあいが苦手で、積極的にかかわることができませんでした。

ろう学校卒業後、日本ししゅうの修ぎようを始めました。ところが、修ぎようがきびしく、

つらくてやめたいと思うようになりました。小さいころからまわりの人にあまえてばかりで、困ったときには、だれかが助けしてくれると思っていたのです。

そんなとき、今もなお心のささえにしているある言葉に出会います。作治さんが二十才のときでした。それは、親せきのお姉さんが言って

くれた言葉です。

「がまんが必要。大切なことは知恵と勇気と意志、この三つをわすれないように努力したら、すなおなあなたなら、きつと何でもできる。」

それから、作治さんの挑戦ちようせんの日々が始まったのです。きびしい修ぎようにもたえ、日本ししゅうのぎじゆつを習得したり、富士山登頂ふじさんに成功したりしました。

そんな中、作治さんは、バイクの免許めんきょを取りたいという夢ゆめを持つようになりました。これま

で耳の聞こえない人はだれも免許を取ったこと
がありませんでした。その当時は耳が不自由な
人が自動車やバイクの免許を取ることは、無理
だと思われていました。しかし、作治さんはあ
きらめませんでした。バイクで日本一周をした
いという強い願いから、この初めての挑戦にの
ぞんだのです。

まず、交通法の本を買って自分一人で勉強を
始めました。その当時、手話を使って会話がで
きる人が少なく、教えてもらうことがむずかし
かったからです。一生けんめい勉強し、運転の
知識を身につけました。自動車学校に入ってか

らも、言葉が通じないため、苦勞することはた
くさんありました。しかし、他の人が練習する
すがたをよく見て、バイクの運転ぎじゅつを身
につけました。人の何十倍もの努力をしてきた
のです。そして、大型自動二輪免許の試験に一
回で合かくできました。

作治さんの挑戦は終わりません。いよいよバ
イクでの日本一周の旅の始まりです。二十七
才のときでした。行く前は
不安な気持ちもありました
が、全国を回る二ヶ月間の
バイクの旅に出発したので



す。うまく言葉が通じなくて失敗したこともあ

わっていきました。

りました。しかし、いろいろな場所でたくさん

の人とのすばらしい出会いがありました。そし

作治さんの挑戦はまだまだ続きます。

て、耳が聞こえなくても、身ぶり手ぶりで体全

（宮ノ下小学校

自作）

部を使ってコミュニケーションがとれるように

なっていました。その旅で全国三百人以上の

人からあたたかいメッセージをもらいました。

「目標に向かって一步一步前進される姿、本当

に美しいと思います。」「一步一步進めば一步の勝

利。目的に向かってがんばってください。」

これらの言葉をきっかけに、作治さんは自分

に自信をもち、人と進んでかかわるように変

みんなの思いをのせて
「若葉台ふるさと音頭」



「明日もいきいき、明日

もいきいき若葉台。」

わたしは、明るく

軽快けいかいなリズムに乗って

歌うこのフレーズが大

好きだ。

習じゆの時間に、まちづくりについて、山田やまだ義則よしのり

さんや浅田あさだ幸子さちこさんの話をうかがった。山を切

り開き二十八年前につくられたニュータウン

「若葉台」には歴史れきしや伝統でんとう行事がほとんどな

い。そこで、子どもたちが、ふるさとを愛あいし、

誇ほこりに思えるものを残のこしていききたいという熱い

思いから、船脊ふなせ克美かつみさんや坂本さかもと正夫まさおさんをは

じめ、まちづくり協議会きぎょうぎかい

のみなさんが中心になっ

て、さまざまな活動をし

てこられたそうだ。

三十周年を記念きねんして「若葉台ふるさと音頭」が

作られた。

わたしたち三年生は、「わかば」（総合そうごう的な学がく）

その一つが「若葉台ふ



るさと音頭」。地域をめぐるながら何ヶ月もかけてメンバーで歌詞を検討し、まちのみんなの愛唱歌として生まれたそうだ。歌詞には、若葉台の自然豊かで美しい四季の風景やそこにらす人々のふれあいがおりにこまれている。その話を聞いて、わたしは、あらためて歌詞を読み返してみた。

「大池、カリヨン、中央公園・・・、若葉台にはすてきがいっぱいだなあ。」そう思えてきて、わたしはなんともうれしくなった。

さらに、音頭に合わせて三浦貞江さんが「わかば若竹踊り」を振付けられた。若葉台にある

竹林の竹を切り、一つ一つ手作りされた鳴子を両手に持って踊る。

子どもからお年寄りまでが楽しんで踊れるようにと、ひざを大きく

曲げる動きをなくし、腕を大きく動かすことで、明るく元気な感じを表現したり、鳴子を鳴らすタイミングを考えたりとたくさんの工夫をされたそうだ。

また、一つの鳴子ができるまでには、竹を切って乾かしたり、穴を開け溝を作ったり、表



にスプレーで色をつけたり、ゴムを通したりと
たくさんの方が技術ぎじゆつと知恵を出してくださった
のだ。若葉台に住む人だけでなく、まちの中に
ある企業きぎやうJCBで働く人たちも昼休みに鳴子の
角にやすりをかけてくださったそうだ。

「鳴子の美しい響ひびきには、まちのみんなのたく
さんの思いがつまっているんだなあ。」

わたしたちの学校は、全校で二百八十五人。
まちができて一番子どもたちが多かったときに
比べると半分ほどに人数が減へってしまい、これ
からさらに少なくなっていくかもしれない。で

も、そんなわたしたちにもできることがある。

それは、毎年、運動会やお祭りで地域の人と
いっしょに元気いっばいに音頭を歌ったり鳴子
を響かせて踊ったりすることだ。三年生で習っ
た歌や踊りは、四年生になって次の三年生に教
えてあげる。そうして、毎年引き継ついでいくこ
とで歴史となり伝統になる。

三・四年生は、この春の運動会でこの歌に鳴
子踊りをつけた「わかば若竹踊り」を初めて地
域のみなさんに披ひら露ろうした。

「明日もいきいき、明日もいきいき若葉台、



ふるさと音頭、はい

っ。」

会場のあちこちから

大きな拍手はくしゅがわき起

こった。三、四年生だけ

で踊り始めた輪わは、終

わったときには、他学年の子どもたち、先生や

家族、地域の人たちでさらに大きな輪になって

いた。鳥取環境大学かんきょうの学生さんも和太鼓わたいこの演奏えんそう

で踊りを盛りも上げてくださった。みんなのうれ

しそうな笑顔を見ていると気持ちが一つになっ

た気がした。

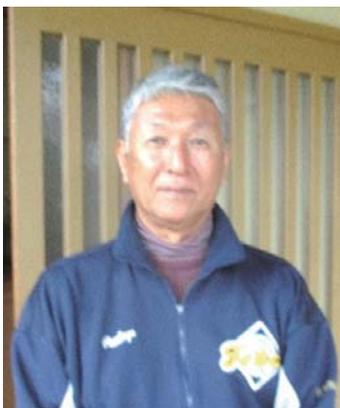
ふと、浅田さんや三浦さんの方に目をやる

と、目頭をそっとぬぐっておられるのが見え

た。それを見て、わたしは、なんだか胸むねがじい

んと熱あつくなった。

毎年、運動会や夏祭りなつまつりで歌い、踊るたびにわ



たしは、浅田さん、三浦さん、船脊さん、坂本
さん、山田さんをはじめ「若葉台」のみなさん
の思いを大切に、これからも大好きなふるさと
ですごしていこうと思うだろう。

(若葉台小学校自作 一部改作)

(注) カリヨン：校舎の上にある大きな鐘

力強く魂をこめて

日本中を駆けめぐれ！逢鷺太鼓連

「ウツタタタタッ、一、二。 ウタタタ、一、二。

ウツタタタタッ、一、二。 ウタタタ、一、二。

……タタタタタ……」

みなさん、これはいったい何のリズムだと思えますか。

これは、気高町逢坂地区の殿部落に伝わる『百里小僧伝説』をモチーフにした、太鼓の出だしのリズムです。それではまず、『百里小僧伝説』について簡単にお話ししましょう。

「むかし、亀井の殿さまの足軽に一日百里を走る『百里小僧』と呼ばれる男がいました。ある日、殿さまは速さの秘密を調べようと百里小僧をつかまえて体を調べました。すると、わきの下に小さな羽がはえていたのです。羽を見られた百



殿にある百里小僧の飛脚塚



H24 全校表現「百里小僧」

里小僧は、それをはずかしく思っ、二度とみんなの前に姿を現しませんでした。あわれに思った殿さまは、飛脚塚を立てて手あつくまつりました。」

この言い伝えを曲に表わそうとして創られたのが、はじめに紹介した太鼓のリズムなのです。そして、この曲には、百里小僧にたくして気高の逢鷺太鼓が日本中を駆けめぐるようにとの願いもこめられているのです。

一九八七年（昭和六十二年）の暮れのことです。

気高町逢坂地区の若者二十名ばかりが公民館に集まりました。逢坂地区公民館の職員だった久野壮さんのアイデアで、九個の太鼓が準備されました。当時青年団長だった桂良春さん、逢坂地区で果物栽培に熱心に取り組む石田昇さんらを中心に、「逢鷺太鼓連」が誕生しました。最初の活動は、見よう見まねで太鼓をたたくことでした。

バレーボールや野球など、スポーツがさかんな逢坂地区でしたが、集まった若者たちには、地区に伝わる盆おどりをもっと活気あるものにした、新しい文化を創り出したいという願いがありました。

まず手始めに、毎年行われる逢坂地区公民館祭りでは何とかして披露できないものかと、二ヶ月間一生懸命に練習にはげみました。曲は、当時宝塚歌劇団で太鼓の曲作りを専門にされていた河崎恒夫先生にお願いし、鹿野ミュージカルにも関

わっておられた中野潤二先生の熱心な指導を受けました。

しかし、音楽活動に経験のない若者たちでしたので、最初はパニツクの連続でした。楽譜のわずか二段程度のリズムをたたくのもひと苦勞でした。

わからないなりにあきらめないで練習を続け、ついに、その日がやってきました。

一九八八年（昭和六十三年）二月の逢坂地区公民館祭り。

逢鷺太鼓連にとって、初めての演奏会です。思い起こせば、楽譜を見ながら直立不動での演奏で、なんとか音が出ていたというものだったそうです。しかし、バチのにぎり方も知らず、楽譜が読めないとところから始めた若者たちが音楽らしきものを大勢の地域の人たちに披露したのです。何

ともいえぬ感動が体全体に走り、「ついにやった。」という達成感でいっぱいになりました。公民館祭りの会場は、地区に新しい文化が誕生した喜びと、エネルギーに満ちた若者たちを賞賛する拍手で包まれたのです。



H25逢坂地区公民館祭り

この後、鹿野桜祭りへの出演、兵庫県姫路城で行われた「第三回国民文化祭 全国太鼓まつり」への出演などの機会を得て、逢鷲太鼓連の演奏活動は走り出しました。姫路城の演奏のときのパンフレットには、こんな紹介文がのっています。「気高町逢坂地区に新しく生まれた、血気さかな若者が演じる太鼓。歴史と情緒ある風土に育まれたふるさと逢坂を、太鼓のかけあいので、か

ろやかに表現。流れるような軽快なリズムに始まり、ゆったりとした中世の春、最後は変化激しい現代を連打で終わります。」

国民文化祭出演がきっかけになったのか、次年度から県内外からイベント出演の依頼がまいこむようになり、多忙な太鼓生活を送るようになりました。また、他の太鼓集団の演奏を研究したり、自分たちで工夫したりして、いくつかのオリジナル曲やアレンジ曲を持つこともできるようになりました。

一九九五年（平成七年）は、この逢鷲太鼓連が関わって新しいグループが誕生する年でもありました。

逢坂小学校六年生を中心とした「ジュニア逢鷲太鼓」の結成です。小学校のクラブ活動に太鼓が

位置づけられた結果でもありましたが、練習時間が夜間ということもあり、逢坂地区公民館、小学校のPTAや先生方の協力あつてのたまものでした。指導は、石田昇さ



音楽「和太鼓演奏をしよう」

んや田中瑞男たなかみずおさんがあたりました。結成後には、町内や町外からも出演依頼がいくつかまいこみ、子どもたちは、その都度つどチームワークを固め成長し、たくましく育っていきました。

そして、二〇一四年（平成二十六年）。逢鷲太鼓連が誕生してから二十七年目になります。

今では、逢坂地区外からもメンバーが集まるようになりました。また、とっとり芸術宅配便事業で県内の学校にワークショップに出向いたり、県内外で年間二十以上のイベントに出演したりし

て、はば広く活動しています。

誕生したときと変わらず、今でも逢鷲太鼓連が大切にしているのは、必ず週二回の練習を続けることです。

「人々の心にひびくよう、バチに魂をこめ、力強く、そして洗練された音を追求していきたい。

さらに、新曲にも取り組み、海外での出演にも挑戦したい。『百里小僧伝説』を伝説に終わらせるのはもったいない。逢鷲太鼓連が日本中を駆けめぐるときはきつと来る！」

今日も逢坂地区に太鼓の音が鳴り響いています。

（逢坂小学校自作 一部改作）



H26「因幡和太鼓の祭典」

池田家墓所を守る
沖 広俊



「昔から、ここがぼくたちの遊び場だったんだ。ところが、気がついたら荒地地になっていた。そんなとき、ぼくのおやじが、一人で墓所の手入れを始めたんだ。家のこ

とよりも墓所のことには一生けん命になるおやじに、ようがんばるなあと思っただもんだ。」

昔をなつかしむようにそう話されるのは、鳥取市在住の沖広俊さんです。

鳥取市国府町奥谷に、鳥取藩初代藩主池田光仲以降、歴代藩主十一代をはじめ、その夫人たちの墓地があります。そこを「池田家墓所」と言いま

す。鳥取藩は、三十二万石の大名で、明治維新まで十二代続きました。

池田家墓所へ行くと、いつもきれいにそうじされた駐車場や参道、すっきりと刈り込まれた植え込みが、私たちを出むかえてくれます。空気も気持ちもりんとして引きしまるようです。その手入れをされているのが、沖広俊さんです。

夏の暑い日も、台風の日も、沖さんには心配が絶えません。暑い日には、墓所に植えられている木々が水を欲しがります。汗をふきながら広い墓所に水をやらなければなりません。また、木々の剪定も大きな仕事の一つです。大雨の時には、山のしゃ面を水がゴウゴウと音を立てて流れます。積み上げられた石垣がくずれはしないかとははらします。また、台風するときには、夜も眠れませんが。そして、夜が明けるのを待って墓所へ出かけ



ます。暴風にあおられて折れた枝々やたおれた灯籠ろうろうを見ると、沖さんの心は痛みます。仕事の関係で、家を留守にするときには、一日に何度も家へ電話をかけて墓所の様子を聞いたり、家族が協力して見回りをしたりします。

そんな沖さんの最も大きな心配は、「自分が管理することができなくなったら、この墓所はどうなるのだろう。」ということでした。一人でもくもくと墓所の手入れをするお父さんの姿を見てきた沖さんだからこそ、「自分が、おやじの後を引きつこう。」と自然に思えたのです。しかし、沖さんは、池田家墓所を管理することの責任と苦

労の大きさを身をもって知っていました。また、管理や修ぜんをするには、お金も労力もかかります。沖さん一人では、解決が難しい問題でした。お金の問題は、鳥取県教育委員会が「池田家墓所保存会」を設置し、資金面の協力をしてくれることになっていたので何とかなるのですが、一人で池田家墓所を守り続けていくには限界があると沖さんは気づいていたのです。

今から三、四年前のことでした。秋になり、木々の剪定をする時期になりました。「今年も、がんばらなければ。」と思うのですが、年を重ねた体には、かなりの重労働でした。そんなとき、「沖さん、剪定を手伝わせてもらえませんか。」と、宮ノ下地区の公民館や奥谷地区の方から声がかかりました。そして、十五、六人くらいの地域の方々が、草刈り機や剪定バサミをもって集まっ

てくれました。一生懸命汗を流してくれる姿を見て、沖さんの顔には笑顔が絶えませんでした。地域の方々の協力は、その後もずっと続きました。

池田家墓所を何とか地域力で守っていかうという動きは、沖さんの予想をはるかにこえ、どんどん広がっていきました。毎年九月に行われる「池田家墓所灯籠会とうろうえ」には、多くの人々がこの池田家墓所を訪れ、幻想的な灯りあかの中で池田藩が栄えた頃に思いをはせます。この灯籠会にも、地域の後押しや協力がたくさんありました。灯籠会の参加者を見つめながら、沖さんの心にはいろいろな思いがわき上がるのでした。そして、沖さんは、ゆらゆらとゆれる灯りを静かに見つめ続けていました。

(宮ノ下小学校 自作)



石碑の人

〜尾崎おき翠みどりとの出会い〜



昭和初年(36歳すぎ)頃

私の学校の児童玄関に大きな石碑があります。毎日その前を通っているのですが、何が書いてあるのか特に気にすることもなかったですし、下級生がその上に乗って遊んでいても注意することもありませんでした。

学校の創立記念日が近づいてきたある日、先生に、

「そろそろ面影小学校の誕生日がやって来ますが、私たちの小学校にはとっても有名な卒業生がいるということを知っていますか？」

と聞かれました。テレビで卒業生が出てきたのを見たこともないし、お父さんやお母さんから聞いたことがないので、私には全くわかりませんで

した。すると、

「その人って、歌手とか俳優さんとかですか？」と質問した友だちがいました。みんな興味しんしんです。先生は、

「さあ、どうでしょう。みなさんがいつも通っているんですがね。児童玄関の手前に石碑が建っているでしょ。あの石碑に何が書いてあるか読んだことありますか？」

とおっしゃいました。みんな首を横にふっていました。

気になった私は、友だちを誘って休憩時間に石碑を見に行くことにしました。そこにはこんな詩が書いてありました。

おもかげをわすれかねつつ
こころかなしきときは
ひとりあゆみて
おもひを野に捨てよ

明治四十一年度卒業生

作家 尾崎 翠



「尾崎翠……。」

友だちが言いました。

「この名前、通学路で見たよ。学校の裏の面影山の近く。そうだ、大杙おおくいのところだ。たしかこの人の住居跡って看板に書いてあったよな。」

私たちの学校を卒業していった尾崎翠という人がどんな人なのか、興味をもった私はインターネットを利用したり、先生から紹介していただいた方からお話を聞いたりして調べました。

尾崎翠さんについて

尾崎翠さんは、一八九六年に岩美町の岩井温泉で、小学校の教員をしている父の長女として生まれました。



大正6年(20歳すぎ)頃

その後、父の転勤で岩美郡面影村(現・鳥取市大杙)に引っ越し、小学校三年生の時、面影小学

校に転校してきました。翠さんは人付き合いが苦手な内気な子でしたが、頭はとてよかったそうです。

高等女学校を卒業後、小学校の代用教員をしながら文学雑誌に作品を投稿していました。しばらくして先生をやめ、日本女子大学に入学します。その時に書いた「無風帯から」という作品が、文学雑誌「新潮」にのったのですが、大学の校風に反すると言われてしまい、自主的に退学することになりました。

翠さんは、文学作品によって女性解放運動を進めた人でした。作品の中で女性の権利の拡張や、男女の平等をうたったので、フェミニストと呼ばれていたそうです。

(※フェミニスト：男女同権論者)
代表的な作品には、「第七官界彷徨ほうちこう」「歩行」「雪の上」などがあります。

たくさんの作品を残していった翠さんでし

たが、執筆活動をしながら頭痛薬を飲み続けたことで体調を崩し、鳥取へ帰ることになりました。故郷に帰ってきてからの翠さんは、これまでのように作品を作らなくなったので、「まぼろしの作家」と呼ばれていたそうです。

翠さんは一九七一年に七十四歳で亡くなりました。しかし、その後、翠さんの作品が映画化されたことにより、再び名前が知られることになり、世界でも翠さんのことを研究するようになったそうです。

「わたしたちの学校でこんなすごい人が勉強していたんだ。この校舎で。わたしたちと同じように。」

調べていくうちに私の心はどんどん高鳴り、そして大きく広がって行くのを感じました。

あと少しでわたしも面影小学校の卒業生になります。

(面影小学校 自作)

【解説】

- 石碑の詩には二つの意味が込められている
- 現代語にすると

『面影を忘れられずに 心悲しいときは 一人歩いて 想いを野に捨てる』

- ① 小説の主人公の、忘れたいけれど忘れられない恋心をうたった

- ② 翠自身の、小さいときから育った面影を忘れない

という思いが込められている

歴史をつなぎ、思いをつなぐ

尾坂 功おさか いさお



総合的な学習の時間
に、わたしたちの住んで
いる面影おもかげの町の歴史や文
化、史跡しせきなどについて調
べることになりました。

さっそく図書館に行つて資料を探したのですが、
なかなか見つかりません。困っていると校長先生
が一冊の本を紹介してくださいました。その本の
名前は『ふるさと大杙郷土誌おおききょうどし』です。

「この本は大杙の歴史保存検討委員会のみなさん
が作られたのですよ。その委員会の委員長をし
ておられるのが尾坂功おさか いさおさんとおっしゃる方
ね。そういえば、尾坂さんの家はあなたの家の

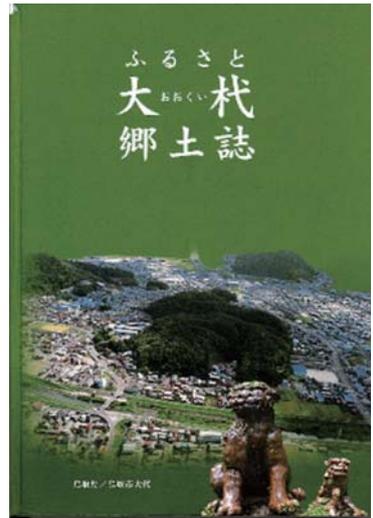
近くじゃなかったかなあ。一度、お話を聞いて
みたらどうかかな。」

わたしは誰だれのことかすぐに分かりました。尾坂
さんなら、登校の時にいつもあいさつしてくれる
近所のおじいちゃんです。

その日の放課後、わたしは尾坂さんの家に行つ
て、お話を聞くことにしました。あいさつをした
ことはあっても、お話をするのは初めてだったの
で、どきどきしながら昔の面影や、この郷土誌の
ことについてお話を聞きました。

尾坂功さんは一九三六年（昭和十一年）に鳥取
市大杙に生まれました。今の面影の町は、住宅や
お店が建ち並び、車の通りも多くなっています
が、尾坂さんが子どもの頃は、辺り一面田んぼと
畑で、これぞ農村というような風景が広がって
いたそうです。

「小学校のころは内気な子どもでね。自分から



進んで前に出て行くということ
はなかったなあ。」
尾坂さんは目を細めながら子ども

尾坂さんの話を聞いていると、わたしの知らない昔の面影の風景が目の前に広がってくるような感じがして、ときどきしてきました。「七十年前の子ども達が、今わたしが生活しているこの同じ場所
で野山をかけ回って楽しんでいたんだ。」と思うと、不思議な感じがしました。

のころのことを思い出し、語ってくださいまし

た。わたしもどちらかというと、人前に出るのは得意ではないし、人見知りもしてしまいます。わたしと似ているなと思って聞いていたのですが、わたしとは全然ちがう所がありました。それは、

「わたしの家の裏は面影山でしょう。それに家の前には川が流れている。今みたいにゲームなんでももちろんない時代だったから、毎日のように

山で遊んだり、川で遊んだり、田んぼで遊んだり。とにかく外で元気に遊んでいたんです。カニを捕ったり、魚を捕まえたり、面影の自然と
いっしょに過ごしていたんですよ。」

尾坂さんはその後、中学、高校と進学していきます。工作が大好きだったということで、高校では建築の勉強をしました。そして、その勉強を生かして役場で働くことになりました。役場では、やはり建築関係の仕事をしていくのですが、仕事をしながら町づくりにたずさわり、町づくりに興味を持ち始めたそうです。

定年となり仕事を離れた尾坂さんでしたが、七十歳を過ぎて、面影の町のことをもつと知りたいと思うようになりました。そこで、面影の郷土研究会に入会することになりました。郷土研究

会に入ってから、尾坂さんは面影の神社や史跡、文学碑、伝説などについて調べ始めます。これまでに郷土研究会で作られた本や図書館の本を調べたり、現地に行つて調べたりしながら新しい発見をしていきます。

「多聞杉たもんすぎって知ってるかい。樹齢三百年を超える立派な杉の木で、鳥取の名木百選にも選ばれているんだけどね。普通の杉はまっすぐに伸びているが、この木は根もすごいが枝も太いままで力強く伸びている。」

面影のことを語り始めた尾坂さんの目は生き生きと輝いていました。

「そうそう、その本の次のページ見てくれるかい。その名簿めいぼはずっと昔大杖にどんな人が住んでいたのかまと



めたものなんだけど、そこに尾坂庄八おさかしゅうはちってあるでしょ。それはわたしのご先祖様なんだけど、その名前と同じ名前が、鳥取とつながりのある福島県の宇倍神社から見つかったんだ。」
「どうやら明治時代、鳥取の人たちが開拓かいたくするために福島に移住したそうです。庄八さんは農業の指導者として開拓団として福島にわたり、そのときの名簿がずっと神社に保管されていたんだそうです。」

「何だかね。自分のルーツを知ることができたよ
うで。歴史つて続いているんだなあをつくづく
思ったねえ。」

わたしのルーツって・・・わたしもご先祖様のことが知りたくなってきました。

尾坂さんの話は続きました。毘沙門堂びしゃもんどうの仏像のこと、塩竈しおがま神社のこと、昔の遊びのこと。どの話も初めて聞くことばかりで、わたしは時間のたつのも忘れていました。時計を見ればもう六時が近

くなっていました。

最後にどうしてこの『ふるさと大杵郷土誌』を作ろうと思ったのか聞いてみました。尾坂さんはこう話してくださいました。

「今、面影の町はどんどん開発されているでしょう。面影には面影山を中心にしてたくさんの遺跡や古墳があるのだけれど、それがどんどん姿を消してしまっているんだ。わたしはね、面影という町にずうっと育てられてきた。そして面影のことを調べるようになり、このふるさとへのほこりがいつそう強くなった。面影の町の歴史こそわたしのルーツだと思うようになった。それはわたしだけのことではなく、あなたにとっても同じこと。みんなのふるさとなんだよ。だからその歴史が消えてなくなってしまうようなように、本にして残していこうと思った。

そうやって次の世代に、あなたたちにつなげていくことがわたしの役目だと思っただよ。」

わたしは尾坂さんにお礼を言っ
て帰りました。外に

出ると空が夕日でオレンジに染まっていました。いつも見慣れたはずの風景が何だか輝いて見えて、胸がドクドクと高鳴るのを感じながら、わたしは家に向かって歩きました。

(面影小学校 自作)



流し雛に思いをこめて

絵筆ひとすじ

前田直衛



席した夫人の敦子さんは、

「皆様、前田直衛を忘れることなく、いろいろな面でお力ぞえいただきまして、感謝の言葉しかありません。ありがとうございます。」

と、深々と頭をさげられました。あたたかい眼差しは、生前の直衛さんに向けられたのと同じ光が

平成二十七年四月

四日、前田直衛生誕

百年を記念して、鳥

取県立博物館で「前

田直衛展」の開会式

が開かれました。出

ありました。

前田直衛は一九一五年（大正四年）四月二十八

日鳥取市用瀬町鷹狩に生まれ、用瀬小学校に通い

ました。小学校時代から絵を描くのが得意で休憩

時間になると同級生から上級生までが凧の絵を描

いてもらうため、

紙を持って（当時

は清書半紙）直衛

の前に並びまし

た。直衛はとても

きちょう面でした

ので、一枚一枚で

いねいに描きまし

た。たくさんの人

が集まるため、順番が回ってこない人は、直衛の



家まで行って描いてもらったほどでした。

その後、直衛は小学校五年生の途中で佐治第三小学校に転校することになりましたが、佐治第三小学校を卒業することなく、鳥取を離れ祖父母をたよって大阪に行きます。そして、小学校を卒業した後、電力会社や豆腐屋などで働き、苦労を重ねました。

大阪で働いているとき、新聞で横山大観の「生々流転」という絵をたまたま見つけます。「こういう美しい世界があるんだ。」と目をさまされたように心から感動したのです。そして小学校の時から絵を描くことが好きだった自分を思い出したのです。

「わたしは、絵を描くことが好きだ。絵を描きたい。絵描きになりたい。そのために絵を習い

たい。」

と思うと、いてもたってもいられず、家のふすまや障子などに墨で絵を描きました。

「どうしても絵描きになりたい。」という思いは日に強くなります。会社の社長さんに相談すると、日本画家で鳥取出身の菅楯彦を紹介されました。直衛は弟子になり、めきめきとうでを上げました。

その後、橋本関雪の指導を受けることになりました。昭和十二年のころでした。「絵描きになる道が開けてきた。」と直衛はたいそう喜びました。



ところがこの年に日中戦争が始まり、戦争に召集しゅうしゅうされます。残念なことに絵の勉強は途中でやめなければなりませんでした。

それから、昭和二十一年に中国から復員ふくいんするまでの九年間、三回も戦地に行ったり、帰国したりし、ようやく復員できた時に、関雪先生が亡くなったと知ったのでした。自分を絵に導みちびいてくださった関雪先生の死、度重たびかさなる戦争体験、そして病気。直衛は、何をやる気も起こりませんでした。

そんな中、直衛は敦子さんと結婚します。無気力に過ごしていた直衛に敦子さんは、「あなた、このまま人生を終わってもいいの。」と語りかけました。「私は絵が描きたい。今まで絵の勉強を一生懸命いっしょうけんめいしていた。そうだ、横山大観のあの美しい世界にもう一度挑戦ちようせんしよう。やるの

だったら、院展いんてん（日本美術院展覧会）で入選できるように頑張がんばってみよう。」と、再び絵を描くことを決心したのでした。

それから四年、絵の制作せいさくに没頭ぼつしやうしました。そして昭和三十五年に院展に「波切なぎり」が入選しました。続けて三十六年「漁港」が入選、三十七年春の院展に「水門」が入選しました。以来毎年のように入選を繰くり返し、院展の院友いんゆう、特待とくだいとなっていたのでした。

「やっと思いがかかった。」直衛と敦子さんは、どんなに喜んだことでしょう。



直衛は、一枚の絵を描くために何冊もスケッチブックを使うほどでいねいにスケッチを行いました。「毎日が真剣勝負だ、少しでも油断し勉強をしなければ、すぐへたになる。」とよく言っていたそうです。何事も、焦らず、怠けず、真剣にこつこつと絵を描いたのでした。

そんな直衛は、昭和六十三年ふるさと用瀬から流し雛の絵を描いて欲しいと頼まれます。スケッチ旅行の後にはいつも用瀬に立ち寄り同級生と会って話をすることを楽しみとしていた直衛です。

ふと見ると、仕事部屋にさん俵が飾ってありました。用瀬に帰った気分になりながら、スケッチをしてみました。素朴な何とも言えない雛の顔。美しい千代川。なつかしい友の顔。しかし、

なかなか、思うように描けません。直衛は、図書館をあちこち回り、子どもの着物の図を捜しました。女の子の姿にも困りました。スケッチをくり返し、いろいろなところで人物や着物の絵の勉強をし、やっと絵を仕上げることができました。

「わたしの六人の娘が生まれ故郷の博物館にもられる。故郷の人にかわいがられるといいなあ。」
そう思いながら描きました。

直衛は、その後もたくさん絵を描き、平成二十年、九十三才でなくなりました。好きだった隠岐の島の舟屋の絵が絶筆でした。その絵は、用瀬町総合支所に飾られています。直衛の

絵を見たいときは、いつでも見られるように佐治にも用瀬にも絵を残したのでした。

(用瀬小学校 自作)



参考資料

- * 『前田直衛 鳥取が生んだ孤高の画人』前田直衛顕彰会
平成二十七年四月
- * 『横川昭子さんへの手紙』前田直衛
昭和五九年一月九日
- * 『原風景を追い続ける』岸本好晋 新聞記事
昭和六三年十月
- * 『郷土が生んだ 日本画家』用瀬町総合支所だより
第一回から第六回
平成二十六年一月から平成二十七年四月
- * 『日本画家・前田直衛』岡村尚昭・岡村寿美男著
平成二十六年十一月

「文武併進」を心の支えにして

山根幸恵



鳥取市が誇る偉大な

剣道家・郷土史家にして、すぐれた教

育者でもある山根幸

恵さんは一九二三年

(大正十二年)に鹿

野町に生まれました。

幼いときはやせて、病気がちな甘えん坊だった

幸恵少年が変わるきっかけになったのは、鳥取第

一中学校(今の鳥取西高校)に入学し、人生の師

となる太田義人先生に出会ったことでした。太田

先生は古くから鳥取藩に伝わる「文武併進」(文・

勉強をきちんとすること。武・体をきたえるこ

と。文武は車の両輪のようにどちらかが欠けてもいけない。この二つを同時に進める併進こそが大切だという教え。)を生徒にきびしく教えました。

幸恵さんは太田先生から剣道を学び、一九四〇年(昭和十五年)、京都の大日本武徳会武道専門学校に進学してさらに剣道を学びます。

この武道専門学校は、武道(剣道・柔道)の先生になるための学校で、四年間武道の基礎基本のみを学ぶ学校でした。ですから試合に出場することは少なく、試合に出ても勝つことはありませんでした。また、武道はもちろん、それを深く理解するための国語と漢詩(中国の詩)も教えられました。剣道でも「剣道は勝ち負けも大切であるが、それ以上に、勝ち負けを通して立派な人間になることが大切なのだ。」と教えられました。その稽古のきびしさはあまりにも有名で、体の調子が悪く

なる学生も多く出たそうです。

幸恵さんの先輩たちがある剣道の大会で優勝し、喜んでいた時も、学校の教官は、

「優勝したということは、ただ勝つための技術だけを使ったということだ。わが校は剣道の指導者になるための学校であって、ただ勝たせるためだけの剣道は教えておらん。」

と目の前で賞状を破り捨て、学生たちをきびしく叱ったそうです。

武道専門学校のきびしい稽古と勉学にたえぬき、卒業した幸恵さんは、広島県の江田島えたじまにあった海軍兵学校に先生として着任します。当時は戦争の激しかったころでした。食べるものがなかったり、多くの仲間が命を落としたりと、戦争の悲惨さを体験しました。

戦争が終わり、幸恵さんは鳥取に帰り、高校で国語と剣道を教えることになりました。「私が指導する生徒の姿は、私自身の姿だ。私の剣道修行しゅぎょうの度合いが直接生徒に伝わり、よいところ、悪いところをそのまま受けついでくれる。教室での授業もそうだ。したがって教師たるもの、研究と稽古を重ねて自らを高める努力を積み、生徒の姿を見て自分をふり返り、反省をしなければならぬのだ。」と、幸恵さん、いや幸恵先生は心にちかい、なお一層いっそう剣道と勉学にはげむのでした。

剣道では、鳥取県一の剣道家として全日本剣道選手権大会に四回出場し、一九七六年（昭和五十一年）には、剣道界最高の段位である八段（注：日本に数ある資格や免許の中でも、最も取ることがむずかしいとされるものの一つ。八段になるための審査は、一千人が受験しても、合格者は六人



中段の構えをとる山根先生
(写真提供：剣道時代)

ぐらいという。長い鳥取県の歴史の中でも、今まで数人しか取っていない）を授けられました。そして指導する生徒たちを何度も全国大会に出場させました。生徒たちにはいつも文武併進の精神を教え、勉強と剣道のどちらかでも手をぬけばきびしく叱かったり、優しくはげましたりして、よい人間となるように導きました。

また幸恵先生は、師匠である太田義人先生から、鳥取藩に代々伝わる剣道の流派で、鳥取市無形文化財でもある雖井蛙流平法第十六代宗家（そ

本剣道連盟の役員にもなり、全国各地に出かけて行つては、剣道を広め、発展させることに力を尽くしました。

の流派を正し

く伝える者）

を受けつぎま

した。さらに

鳥取県剣道連

盟会長や全日

もう一つ、幸恵先生が大好きだったのは、自分

のふるさとの歴史を調べる郷土史研究でした。鹿

野尋常高等小学校（今の鹿野小学校）では山下清

三先生に、鳥取第一中学校では山本嘉将先生に

と、鳥取市が誇る有名な文学者や研究者の先生に

教えを受けたこともあって、郷土の歴史を調べて

研究し、書いてまとめることは大きな楽しみであ

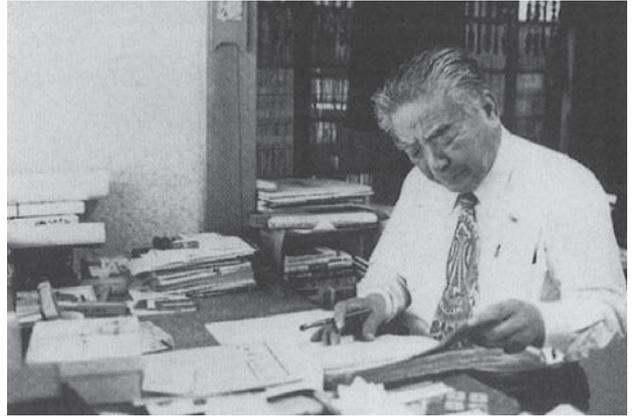
り喜びでした。しかし、昔のことが書いてある資

料は少なく、研究がうまくいかないことも多くあ

りました。でも幸恵先生は決してあきらめること

なく、こつこつと努力を積んでいきました。する

と思わぬところから情報が入ってきたり、資料の



原稿の執筆をおこなう山根先生
(写真提供：剣道時代)

提供を受けたりすることが多くありました。それは剣道や郷土史研究を通して知り合った、全国の仲間から寄せられたものでした。「一生懸命研究に打ちこめば、資料のほうから私のところにやってくるなあ。」と幸恵先生は思っていた。鳥取藩の歴史、ふるさと鹿野町の殿様であった亀井茲矩、鳥取の剣道の歴史など、さまざまな研究の成果をまとめた本は数多くあり、今でも研究家の参考書となっています。

また、一九七七年（昭和五十二年）からは鳥取西工業高校校長を、一九八一年（昭和五十六年）

からは鳥取県立博物館長を務め、数多くの優秀な人材を世に送り出しました。このような業績が認められて一九九七年（平成九年）には勲四等瑞宝章が国から授与されました。

ある日のこと、やはり剣道にはげむ幸恵先生の孫の男の子がこんなことをたずねました。

「おじいちゃんは剣道でこれ以上はない最高の八段になつて、強くてうまいのに稽古を欠かさないよね。もう目標とするもの



尚徳練武館にて、少年指導をおこなう山根先生
(写真提供：剣道時代)

はないんじゃないの。それなのになぜ稽古するの。」

すると幸恵先生はこう答えました。

「そうだなあ。もっと強くなりたい、どうしたら強くなるかと思って稽古しているよ。試合で対戦相手と向かい合った時にはどうしても、勝りたい、いいところを見せたいという欲や、負けたらどうしようという不安が心に出てくるんだよ。そんな欲や不安にゆれ動く心を稽古によって乗りこえなきゃだめなんだ。あのね、修行というものには終わりが無いんだよ。どうやったらかもつとよくなるか、いつも考えているなあ。まあ、これは剣道に限った話ではないけどね。」

二〇〇二年（平成十四年）一月二十四日、その生涯を通して「文武併進」を実行した山根幸恵先生はこの世を去りました。今も鹿野町の人々は先

雖井蛙流兵法「五乱太刀分」より「稻妻」
(写真提供：剣道日本)



雖井蛙流兵法の八相の構え
(写真提供：剣道時代)

生の業績をたたえ、その教えを忘れまいと「山根幸恵杯（現 亀井茲矩杯）」をつくり、剣道をがんばっている子どもたちに贈っています。

（鹿野小学校 自作）

中
学
校

私にめざした白

（人間国宝

前田昭博）



平成二十五年九月二十六日、鳥取市河原町在住の陶芸家、前田昭博まえたあきひろさんが鳥取県在住者としては初めて人間国宝（重要無形文化財保
持者）に認定されました。

前田さんは鳥取市河原町に生まれ、大阪芸術大学工芸学科陶芸専攻を卒業後、生まれ故郷である河原町ほんが本鹿を創作の拠点として活動してこられました。

自分の進路を決める時期が迫った大学四年生の頃、研究室の先生に、陶芸は好きだが将来陶芸家になるほどの自信はなく、進路について迷っていると話したら、

「そういうことは考えてもどうしようもない。先のことなんて分からないから、やってみるしか

ない。」

と言われました。

その言葉で決心がつかしましたが、実際は不安だらけでした。技術もいるし、評価されるかどうかも分からない。それでも、自分の好きな陶芸をやりたいという情熱だけはありました。さらに先生はこう続けられました。

「先のことを心配してやめるといふ人は多いが、とことんやって駄目だったという人は聞いたことがない。」

そう言われると気が楽になったので、自分の生まれ故郷に帰って一年間やってみることにしました。

ところが、いざ帰って一人でやってみると、全くうまくいきませんでした。自分の思い描くような作品は作れず、陶芸家を志すことなど無理だと思えました。ただ、これまでとは少し違うことがありました。頑張って作った作品の展示会を開くと、大学時代の展示会の時よりも多くの方々に来ていただけました。また、

「ずっと楽しみにしてきたんですよ。」

と、お客さんからうれしい言葉をかけられたり、新聞にも紹介していただいたりしたのでもう一年頑張ってみようと思いました。

次の年も制作を始めましたが、なかなか思うようにいきませんでした。素焼きの大きな作品がよく割れて本当に困り、大学の先生に電話をかけてアドバイスを受けることにしました。その通りにしたつもりだったのですが、何か違っていったようで、ことごとく割れてしまいました。また、同じ磁器をつくっている後輩に、焼くときの温度について聞いたこともありました。

「自分はいつも一二八〇度ぐらいで焼くのだが、少し温度を下げて焼いても大丈夫か。」
と、聞くと、後輩は

「いつも一二六〇度ぐらいで焼きますが、全然割れたことがないですよ。」

と、教えてくれました。それなら大丈夫だと思い、コンクールに出そうと思っていた思い入れの強い作品をその低い温度で焼いたら、全部割れてしまいま



験から、やはり、自分のめざす作品は自分が試行錯誤して作り上げるしかない、本当に求めている大切なことは、人に頼るのではなく、自分で見つけるしかないということに気づいたのです。

それから、毎年個展を開くことと、陶芸コンクールへ出品することを目標に続けてきました。私の個展を楽しみにしてくださる方がいるということが仕事の励みになり、コンクールで入選したら、来年も続けてみよう、そんな思いで何年か過ごしました。

そして、三十六歳のとき、日本陶芸展という大きなコンクールで優秀賞をいただきました。毎年、もう今年で陶芸をやめようと悩みながら陶芸を続けてきました。でも、この賞をきっかけに、できたら一

した。

後で分かったことですが、自分が使っている土と、後輩が使っている土とは違っていたのです。このときの経

生陶芸をしたいと十四年目にして初めて思えるようになりました。その後、東京で定期的に展覧会をさせてもらえることにもなり、やっとこの頃、陶芸家として少しずつ評価されはじめたのかな：と実感が湧いてきました。

ふり返ってみると、陶芸家への道をまっすぐ歩んできたようにも思えますが、苦しいことの方が多かったと思います。自分の生活もあり、自宅では果樹園の手伝いもしながら作品を作り続けました。何度も何度も挫折しそうになりながら、少しずつ時間をかけて陶芸家という職業を勝ち取ってきたような気がします。でも、そんな状況の中でも、どうせやるなら日本一の白磁をつくりたいという夢だけは持っていました。人の一生は一回きりだから、とことんやっただと言えような、私ならではの白磁を作りたい。その思いを持って制作に打ち込むことで、一生懸命生きる方に自分が向かっていくことができたとような気がします。

自分が生まれ育った故郷の幼い頃から見慣れた風

景や山陰の冬からインスピレーションを受け、めざしたのは力強さと柔らかさを兼ね備えた白一色の器。それは混じりけのない白一色の白磁に自分の理想とする白色を追求するという答えのない挑戦でした。磁器の産地でもなく、師匠もいない中、三十六年間たった一人で白磁に向き合い、世に出したこの白は、前田さんには作り出すことのできない独自の白として、日本国内のみならず世界各地で広く認められています。

(河原中学校 一部改作)

【出典 鳥取市立河原中学校創立五十周年記念
講演「私と白磁」より】



八芳園にかけた夢

八芳園設立者 長谷敏司



長谷敏司は、明治三十六年（一九〇三年）二月二十三日、八頭郡佐治村古市（鳥取市佐治町古市）に生まれた。

母の名はのぶ、父は結婚後にもまもなく亡くなった。敏司の生家はもともと裕福な家であったが、不運が続き生活は苦しくなる一方であった。母は、二歳の敏司を祖父重次郎、伯父重夫に託し、生活費をかせぐため大阪の料亭に住み込みで働くことになった。

敏司は、すすくと育ち、勉強に熱心に取り組んだ。しかし、大正三年（一九一四年）、世話になっていた祖父の重次郎が病気で亡くなってしまった。葬儀の後で、母は、兄や親せきの主だった人に相談した。

「あの子の先行きの事を考えると、何とかして小

学校の高等科だけは卒業させてやりたいと思います。私も精一杯仕送りをしますけえ、あんやさん、それまでお世話を願えますまいか。その後は、大阪で何か修行の口を探してやりたいと思つとるんですけど。」

母の意見に反対する者はなかった。敏司もこの決定に納得した。

大正六年（一九一七年）四月、小学校高等科を卒業した敏司は、生家再興を胸に、大阪へ向かう決意をする。敏司は用瀬の町まで出ると、そこから鳥取の乗合馬車に乗った。千代川べりの長い道をトコトコと走り続けて、やがて鳥取の町に着いた。生まれて初めて乗った汽車は、プラットホームで手をふる伯父の姿をたちまち小さく後に残し、朝の光の中へ走り出した。鳥取の町までは小学校の修学旅行などで二度ほど出たことがあったが、そこから先は全くの未知の世界であり、十四歳の少年のたった一人の旅立ちであった。

大阪最初の奉公先は、紙類卸商浜田商店での丁稚奉公であった。これを選んだのには理由があった。

佐治では、和紙製造業に力を入れている家は、食べることに不自由しない暮らしをしていたからだ。また、自分もやがては母を伴って帰郷し、伯父と三人で製紙を始めて、家の再興を遂げたいという思いがあったからだ。大きな夢を胸にがむしゃらに働いたが、不況の余波を受け、まもなく閉店。自分の夢をかけて打ち込んできた努力が、水の泡のように空しく消え去った。

その後、食うや食わずの職探しの末、大正九年（一九二〇年）十一月難波駅前料亭「明月楼」に雑役夫として雇われることになった。雑役夫としての一日は、朝は明るくなる前に荷車を引いて市場に行き、主人が仕入れる野菜・魚などの食材を積んで帰るや否や、朝ごはんをかきこみ、次から次へと投げ出される鍋と金串をピカピカに磨き、誰よりも遅くまで調理場に残って片付けをする。深夜十二時、一時まで働くことも珍しくなかった。また、読み書きそろばんが得意だった敏司は、帳簿の手伝いや献立表を書く仕事も任されることがあった。しかし、敏司は紙業で成功するんだという夢を忘れることは

なかった。

へとへとに疲れきって過ごした「明月楼」ではあったが敏司は三つのことを学んだ。一つ目は、一流料亭の経営術である。二つ目は、雑魚場の事情に通じたことである。三つ目は、人間に対する理解の目を深めたことである。そして、敏司は紙業開始の資本づくりのために、料理の世界に生きることを決心し、一年余りで「明月楼」を辞めた。その後、大阪、神戸、高松などの料亭、料理旅館を転々と渡り歩いて板前修行に打ち込んだ。昭和六年（一九三一年）六月、求められて上京。銀座の高級カフェー「サロン春」に入店。敏司二八歳、人生の転機であった。その後「サロン春」は、昭和十六年（一九四一年）に始まった太平洋戦争の影響で閉店となり、敏司は失業を余儀なくされた。

しかし、昭和十八年（一九四三年）東京銀座に大衆割烹「新金春」を開業して独立。戦災で焼失したが、戦後まもなく再建。その後、料亭「治作」などを相次いで開店。復興途上の銀座の真ん中とその周辺にたちまち六つの店をもつことになった。その猛

進ぶりは料飲業界で早々と有名となり、注目的になつた。

そんな長谷敏司に共同経営の話が持ち込まれた。「東京の白金台しろかねだいに久原房之助くはらふさのすけの邸宅がある。

一万二〇〇〇坪の広大な日本庭園を持つ。この屋敷と庭園の一部を借りて料飲店を経営したい。ついではその共同経営者になつてくれないか。」

斎藤ハマという人物からの申し入れであつた。

初めはどうも他人との共同経営は不向きで、この話は適任ではないように思い、断つた敏司だつた。しかし、ハマの人柄、久原という人物の大きさ、そして何よりその庭園の見事に一目で魅せられた。由緒深い自然庭園のなかで日本料理が提供されてこそ日本料理の醍醐味は一層増す。この話は千載一遇のチャンスかもしれない。自分の手に余るかも知れないが、思い切つてやってみよう。料理の世界に生きてきた敏司の胸に新たな意欲が燃え上がり、共同経営に乗り出す決意をしたのだつた。庭園の一部を借りた料亭の名は「八芳園はっほうえん」と命名された。開業の準備が急ピッチで進められ、会長に長谷敏司、社長に

斎藤ハマが座り、いよいよ株式会社八芳園がスタートした。昭和二十五年（一九五〇年）五月八日のことだつた。一年後にはハマが経営から手を引いたため、敏司の単独経営となつた。

大庭園経営にますます魅力を感じ始めた敏司は、「八芳園」の全面買収を考えるようになっていった。しかし、「あせるな。時の許す限り、とことんまで検討を加えよう。そ

して、神の声を聞くのだ。」と、慎重の上にも慎重を期した。何千万円という桁違いの支払いには、一代の命運がかかっていた。日々悩み続けたが、小さな安定ではなく大きな危険を伴うが夢にかける道を選び、昭和二十七年（一九五二年）、久原邸を全面買収。こうして、「八芳園」は名実



ともに長谷敏司の所有となった。

「八芳園」は、現代の東京にあつて今もなお、樹齢数百年の樹木や渡り鳥の姿などを見ることのできる庭園である。敏司が愛し、守り続けてきたこの庭園の風情や日本の伝統美、豊かな和の心は、次の世代へ確かに受け継がれている。

勉学を志しながら経済的に許されなかつた敏司。その思いを引き継いだ遺族は、郷土の発展の礎である青少年の育成に貢献したいと、育英奨学財団「財団法人長谷育英奨学会」を設立。奨学金を受けた多くの青少年が現在日本各地で活躍している。

（千代南中学校自作を一部改作）

●表紙・表紙裏の題字

柴山 抱海

●写真や図版の提供

・各人物の顔写真

『鳥取市人物伝きらめく120人』より転載

・各資料中の写真

鳥取市立面影小学校、若葉台小学校、逢坂小学校、宮ノ下小学校、用瀬小学校、世紀小学校、湖東中学校、河原中学校、千代南中学校

全日本剣道連盟、鳥取県二十世紀梨記念館、八芳園、大杙歴史保存検討委員会、前田直衛顕彰会

平成 28 年度

鳥取市小・中学校道徳郷土資料集第 2 編 ～児童・生徒用～

「鳥取市の志」

平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行	鳥取市教育委員会学校教育課指導係
所在地	鳥取市上魚町 3 9 番地
電話番号	0 8 5 7 - 2 0 - 3 3 5 7
印刷会社	(有) 福井印刷

